

# 生物多様性保全への私たち生活者の取り組み

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所

所長 多木 秀雄

Written by Hideo Taki

## はじめに

生物多様性という言葉を目にする機会は増えてきた。ただ、その意味、問題をきちんと理解できていない人はまだまだ多くないと思われる。

「生物多様性の保全」は、地球温暖化の防止とともに、私たち人間が地球上において持続可能な生活を送ってゆくうえで、ひじょうに重要な問題である。今年の10月には、愛知県名古屋市の開催で、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催される予定であり、地球温暖化問題と同じように、問題に対する国際的な取り組みの枠組みが議論されることになっている。

今回の特集では、この「生物多様性の保全」に焦点を当て、その本質的な意味を考えるとともに、私たち生活者が自分が住む地域近隣の人々をはじめ、行政、研究者・専門家、NPO、企業等と連携しながら、これにいかに対処し、地球規模での持続可能な社会を構築してゆくべきかを問いかけるものとした。

## 「生物多様性の保全」に関する国内外での議論・取り決め

1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議(地球サミット)において、気候変動枠組み条約とともに、生物多様性条約が採択され、168カ国が条約に署名した。条約は93年に発効し、2009年12月現在、日本を含む192カ国とEUがこの条約に加盟している。米国は批准せず、加盟もしていない。同条約の中では、生物多様性は、種内の遺伝子の多様性、種の多様性、生態系の多様性の3つのレベルの多様性を保全する必要性が指摘された。日本は93年に生物多様性条約を批准し、この条約の履行を担保するための国内法として、2008年6月に生物多様性基本法が成立・施行された。生物多様性条約は、締約国が生物多様性国家戦略を策定するよう求めており、日本では95年に第一次、02年に第二次、07年に第三次戦略が閣議決定された。

## 「生物多様性の保全」の危機を招く要因

### 問題の所在

世界各地で生物多様性に関する深刻な状態が発生している。生物多様性は、以下のような様々な要因により損なわれるとされる。私たち人間はその保全に重要な役割を担う。というよりもむしろ、私たちの近代生活とそれに伴う生活環境の整備が、生物の生態系を乱し、彼らの生命を脅かすきっかけをつくってきたと言える。

#### 1 人間活動や開発による危機

人間活動や開発行為により、直接的な生物の過剰採取や生息地の減少によりさらされる危機である。生息地が失われることは、種の減少の大きな要因であり、ひいては絶滅が危惧される。

#### 2 人間の里地・里山等の手入れ不足による危機

様々な形で人間の手が加わることによりもたらされるかく乱により特有の多様性が均衡・維持されてきた自然の生態系が、農業形態や生活様式の変化等により人間の手が加わらなくなることによる危機である。里地・里山等では、人間活動の減少、そのような手入れ不足による環境の質の変化が生物多様性を脅かす危機が広がっている。

#### 3 人間により持ち込まれた外来生物による危機

人間活動によって、意図的あるいは非意図的に種が本来の生息地を越えて別の地域に持ち込まれ、そこで定着した場合、その地域の生態系をかく乱し、在来種を絶滅させる可能性がある。このような外来生物による危機である。

#### 4 環境汚染による危機

人間活動に伴う様々な環境汚染は生物の生存への大きな脅威と

なっている。とくに、影響について未解明な部分がある化学物質の使用は、私たちが気づかないままに生態系に悪影響を与えている可能性もある。

#### 5 地球温暖化による危機

生物多様性は気候変動に対してとくに脆弱であり、種の絶滅や生態系がかく乱されることが危惧される。国際的な組織である「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」は、平均気温が2℃上昇すると多くの生態系がかく乱されて深刻な影響があると予想している。

## 私たち生活者が取り組んでゆきたいこと

#### 1 問題の重要性の認識

人間は生物多様性を構成する一要素として、多様な生物と共生し、また日々自然の生態系から多くの恵み（生態系サービス）を受けて衣食住、豊かな生活を築いてきたが、その問題の重要性については、近年その危機が語られるようになってはじめて意識するようになってきた。そして、そのような生物多様性が損なわれることは、私たち人間社会に大きな影響を与える深刻な問題であることに気づいた。人間中心の価値観で日々の生活に没頭していると、自然やそこに住む生物の変化とそれによる問題の大きさを感覚できないため、事態の深刻さが増してから気づくことになる。生物多様性の問題も、地球温暖化問題と同様に、一人ひとりが認識を深め、そして多くの人々の共通認識に広げてゆくことが大切である。

生活者が問題への認識を深めるためには、知識を習得し、多種多様な生命とのつながりが実感できる体験をする学習機会が求められる。とくに現代の子供たちにとって、自然体験学習の意義は大きい。子供の頃の様々な「いのち」とのつき合いの体験は、大人になってからの

考え方、行動を左右する。

私たちの日々の生活の周囲、ライフスタイルを注意して見直してみ  
てはどうだろうか。そうすると、生物多様性との関わりについて具  
体的な問題に気づいてゆく。屋外を歩き、少し時間をとって草木、花や  
鳥、その他の生き物に目を近づけてみる。身近にある自然と生物を観  
察することにより、彼らの息吹、表情に気づき、そのいのちの大切さを  
意識するようになる。私たちが幼い頃、あるいはほんの10年程前に身  
近にいた生物の姿は今でも見つけられるだろうか。

このようにして、より多くの人々が情報や体験から考え、自身の目  
を養い、生物多様性の問題に積極的に関わってゆくことが問題への対  
処に前進することになる。

## 2 情報・データベースの整備と活用・伝承

生物多様性の実態に関する情報や科学的データが、行政、専門機関  
や学識者等により整えられることが、先に述べた「問題の重要性の認  
識」と対応行動の基本となる。生物の「遺伝子」「種」「生態系」の多  
様性は、ひじょうに敏感なものである。善意であっても、正しい情報と  
データの理解に基づかない不用意な活動によって、生物多様性が急速  
に損なわれてゆく場合もある。

多くの機関や方々の尽力により、「生物多様性の保全」の重要性に関  
連して、例えば幾つかの生命体の絶滅や、ここ何年かの間ほどの程度  
の種の絶滅が見られるか等の数字が紹介されてきている。言うまでも  
なくこれらはひとつの重要なデータであるが、数字の見方には様々な  
意見があり、時間もかかるのがこれから補強されることが期待される。

地域の気候や風土は様々である。地域によって固有の種も  
多いため、一般的な情報・データとともに、地域において協  
力体制を敷き、貴重な地域資源を後世に伝えてゆくための情  
報やデータベースを整備することが大切である。伝統野菜等  
も含め、その土地固有の多様な生物体がどのような地域の文

化、生物間のつながりによっていのちを保っているのか等も、調査  
し、後世に伝えてゆくべき地域の情報、データである。

## おわりに

アメリカ人の海洋生物学者レイチェル・カーソンは、1962年  
に出版した著書『沈黙の春』において人間活動による自然の生態系  
への影響と人間の未来を問いかけ、「地球は自分たち人間だけのもの  
ではない」と語り、さらに1965年に出版した著書『センス・オ  
ブ・ワンダー』において、子供たちに神秘さや不思議さに目を見張る  
感性を持ち続けさせることの重要性を語っている。現代に生きる私  
たちは、整備されつつある科学的知見、情報により認識を深め、自ら  
行動するとともに、子供たちの五感を刺激する自然体験学習等によ  
る「生物多様性の保全」のための積極的な取り組みを進めたい。

今年の2010年は「国際生物多様性年」、また10月には「生物多  
様性の保全」に関するCOP10が名古屋市において開催されること  
もあり、私たち人間が地球温暖化問題とともに真剣に取り組むべき  
問題として、「生物多様性の保全」を本号の特集テーマとして取り上  
げた。識者の方々による様々な視点による論考や、既に具体的な取  
り組みが行なわれている事例等を参考にさせていただき、この問題へ  
の一層の理解と保全活動に活かされることを願うものである。

私どもCELは、中長期的な視点から「持続可能な生活・社会づく  
り」を目指し、エネルギー・環境、住まい・生活、都市・コミュニテイ  
の領域における研究、実践活動と発信・提言を行なっている。私たち  
人間が持続可能な生活・社会を築くうえで不可欠な自然との共生、  
「生物多様性の保全」に関しても、引き続き有益な情報発信と提言を  
続けてゆきたいと考えている。